

ニホンナシ‘新高’における側枝の更新時期

谷口政弘・大崎伸一¹⁾・岡田眞治・北村光康
 (熊本県農業研究センター果樹研究所・¹⁾宇城農業改良普及センター)

Masahiro TANIGUCHI, Shinichi OSAKI, Shinji OKADA and Mitsuyasu KITAMURA :
 The Time of Regeneration of Lateral in Japanese Pear ‘Niitaka’

‘新高’は、短果枝の維持が容易なことから、側枝が長い年月にわたり利用されることが多く、側枝の更新が遅い傾向にあり、高品質安定生産のためには生産性の高い良質な側枝を利用する必要がある。

そこで、整枝・せん定の際の判断材料に資するため、側枝齢並びに着果枝齢と果実品質との関係について検討した。

1. 材料および方法

‘新高’の成木1樹を供試し、23、24年生時に全果実について果重、果形、果肉硬度および糖度を調査し、それぞれの側枝齢と着果枝齢を調査した。

なお、側枝齢と着果枝齢は、冬季せん定時の枝齢とした。

果形は、良好（5）、やや良好（4）、普通（3）、やや不良（2）、不良（1）の5段階で評価した。また、果肉硬度と糖度は赤道部を測定した。

2. 結果および考察

側枝齢と果実の大きさとの関係では、3～5年生側枝に着果した果実が1～2年生側枝や6年生以上の側枝に

着果した果実より大きかった。

果形は、5年生以上の側枝に着果した果実が他より優れていた。

果肉硬度は、2年生以下の側枝に着果した果実が他よりやや低かったが、あまり大きい差ではなかった。糖度は、2年生側枝が最も高く、腋花芽（1年生）が最も低かった（第1表）。

着果枝齢と果実の大きさの関係でも、3～5年生短果枝に着果した果実が、腋花芽（1年生）、2年生短果枝、6年生以上の短果枝より大きかった。

果形は、5年生短果枝に着果した果実が最も優れ、6年生以上の短果枝に着果した果実が最も劣っていた。

果肉硬度は、5年生以上の短果枝に着果した果実が硬く、1年生短果枝に着果した果実が最も軟らかかった。糖度は、着果枝齢間に大きな差はみられなかった（第2表）。

以上の結果から、3～5年生の側枝および短果枝に着果した果実が最も品質が優れていた。よって、1～5年生側枝までは均等に利用し、6年生になった時点で更新を行った方がよいと考えられた。

第1表 ‘新高’の側枝齢と果実品質との関係

側枝齢	果重	果形	果肉硬度	糖度(Brix)
	(g)		(lbs)	
1年生	712	3.6	3.6	12.5
2年生	725	3.6	3.4	13.8
3年生	784	3.7	3.7	13.1
4年生	767	3.6	3.7	13.4
5年生	773	4.2	3.9	13.3
6年生以上	734	4.5	3.8	13.0

注) a) 側枝齢は冬季せん定時で判断した

b) 果形：良好（5）、やや良好（4）、普通（3）、やや不良（2）、不良（1）

第2表 ‘新高’の着果枝齢と果実品質との関係

着果枝齢	果重	果形	果肉硬度	糖度(Brix)
	(g)		(lbs)	
1年生	713	3.3	3.4	13.0
2年生	735	3.6	3.7	13.0
3年生	765	3.6	3.9	13.2
4年生	797	3.5	3.8	13.0
5年生	774	4.0	4.3	13.2
6年生以上	747	2.9	4.0	12.9

注) a) 着果枝齢は冬季せん定時で判断した

b) 果形：良好（5）、やや良好（4）、普通（3）、やや不良（2）、不良（1）